

## 市制施行 100 周年の前後 尾道の新時代到来～駅前再開発としまなみ全通～

市制施行 100 周年を刻んだ 1998（平成 10）年前後の尾道は、街が大きく変貌を遂げゆく時期となりました。

変わりゆく尾道を最も象徴したのが駅前再開発事業であり、100 周年前夜の 1997（平成 9）年から着工され、駅前ロータリー及び港湾緑地帯の整備、棧橋とホテル、商業施設を複合したウォーターフロントビル、公会堂に続く文化ホールとしての役割を担うしまなみ交流館（テアトロシエルネ）、商業施設とマンションを複合した再開発ビル（バルポール）建設と、今にすっかり馴染み溶け込んだ、新たな尾道の景観がここに形成されました（2000・平成 12 年事業完了）。

駅前再開発と並び、この時期の尾道を象徴したのが、尾道大橋と兄弟橋を形成する新尾道大橋の完成（1999・平成 11 年 5 月供用開始）と、しまなみ架橋の全通で、尾道大橋の時代から夢見られて来た本四架橋尾道～今治ルートは、ここに結実を見ることになりました。

100 周年と共に、二つの大きな節目と転換を迎えたこの時期は、まさに新時代の尾道到来を予感させ、その幕開けを華々しく印象づけるものとなりました。



再開発前後の尾道駅前の航空写真  
（上・再開発前）1993（平成 5）年 /  
（下・再開発後）2000（平成 12）年



新尾道大橋建設工事の記録写真  
1997（平成 9）～1998（平成 10）年  
（故）土本壽美氏撮影  
尾道学研究会提供

## 尾道商業会議所記念館 第 3 4 回企画展示解説

2018 年 6 月 1 日～2018 年 10 月 31 日

テーマ 商都尾道の市制施行と二つの架橋

2018（平成 30）年 4 月 1 日、尾道市（合併以前の旧尾道市域）は市制施行 120 周年の節目の年を迎えました。尾道市が誕生したのは 1898（明治 31）年 4 月 1 日で、全国で 45 番目、県内では広島市に次いで 2 番目の市制施行となりました。

誕生直後の尾道市の面積は 4.10 平方 km（東西 3.2 km、南北 2.0 km）、人口は 2 万 1,792 人、世帯数は 4,679 世帯でしたが、120 年目の現在は、合併により御調・向島・因島・瀬戸田を加え、面積は 285.11 平方 km、人口 13 万 8,415 人、世帯数は 6 万 4,725 世帯となっています（平成 30 年 4 月 30 日現在）。

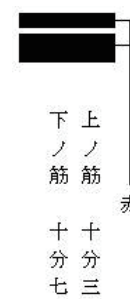
この早い段階での市制施行の背景には、商都としての基盤整備と、それによるめざましい躍進・発展がありました。

中世の開港以来、海運を軸にした商港としての基盤が整い、遣明船、近世では北前船の往来により、各地の様々な人や物が流通し、商工業が大いに隆盛しました。

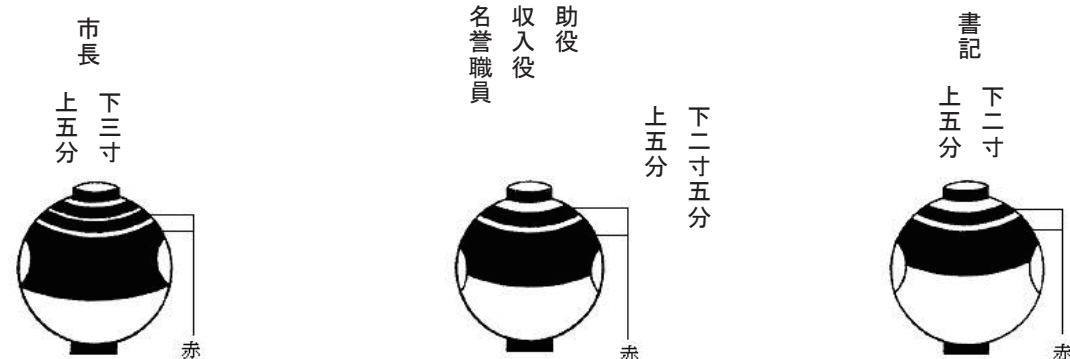
近代以降もその勢いは衰えることなく、米穀や塩、肥料、運送等の各種の組合が相次いで設立され、金融では第六十六国立銀行や住友銀行などの銀行が林立し（久保米場町では銀行街も形成）、広島県下で最初の商業学校となる県立尾道商業高校（開校時は公立尾道商業学校）の開校に至りました。

商業の源である人の往来を支える交通網の面では、それまでの海上交通に加えて、鉄道敷設により陸上交通も整い、海陸結節の商港都市としての尾道の重要性は、益々高まることになりました。本展示では、尾道市誕生前後に見る商都尾道の様相と、市制施行 70 周年と 100 周年の前後に見られた、瀬戸内の十字路を形成した尾道大橋、しまなみ・やまなみを繋ぐ新尾道大橋の開通と、新時代の尾道到来を印象付けた駅前再開発にスポットを当ててみます。

### 第 1 条 市ノ徽章ヲ次ノ如ク定ム



### 第 2 条 市吏員ノ提灯徽章次図ノ如シ 但各自定紋ヲ 3 ヶ所ニ付ス



### 尾道市の市章と市吏員の提灯徽章の図

1898（明治 31）年 10 月 14 日議決 『尾道市例規集』第 1 章

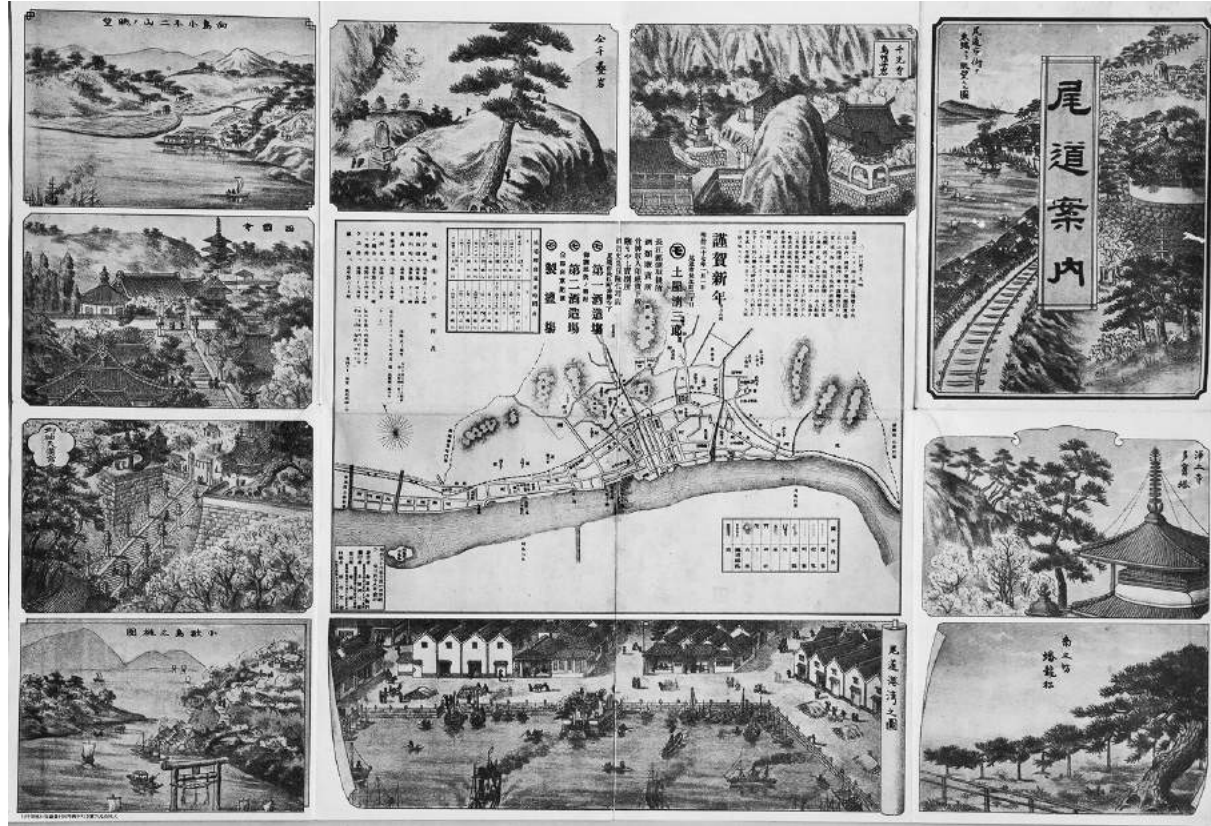
### 【参考年表】市制施行前後における尾道の動向（明治期）

年	月日	事項
1871(明治 4)	7 月 14 日	尾道町(尾崎・久保・十四日(とよひ)・土堂、御調郡内に属す)
1873(明治 6)	10 月 1 日	久保町新地に尾道電信分局設置(神戸同広島間を繋ぐ)。1887 年に電信局に改称
同	同	住友家が土堂本通りに分店を設置(住友銀行尾道支店の前身)
1874(明治 7)	2 月 22 日	広島県支庁設置
1875(明治 8)	1 月 1 日	尾道郵便局発足
同	3 月 12 日	御調郡役所を設置。広島県支庁を廃して戸長(ごちょう)役場設置
1876(明治 9)	同	尾道町と後地村(周辺の後背地)合併
1877(明治 10)	2 月	尾道警察署発足
1878(明治 11)	11 月 29 日	第六十六国立銀行(広島銀行の前身)開設
同	6 月 25 日	久保町常称寺内に尾道区裁判所設置
1884(明治 17)	5 月	大阪商船株式会社の定期船が寄港
1887(明治 20)	1 月 2 日	尾道問屋組合設立
1888(明治 21)	4 月 1 日	市制町村制発布
同	10 月 20 日	県下初の商業校として久保町米場に公立尾道商業学校開校(尾道商業高校の前身)
1889(明治 22)	4 月 1 日	町制施行。尾崎・久保・十四日・土堂・東御所・西御所の 6 町に分ける。町長に熊谷孝平、助役に石井三三。当初予算は 3 万 4,276 円 98 銭 3 厘
同	7 月 16 日	尾道郵便電信局開設(1903 年に尾道郵便局に改称)
同	9 月 1 日	尾道財務出張所(現尾道県税事務所)設置
1891(明治 24)	10 月 3 日	山陽鉄道(現 JR 山陽本線)福山～尾道間開通。尾道駅開業
1892(明治 25)	7 月	尾道商業学校が久保米場町から長江町 4 丁目(現在の長江 3 丁目・長江中学校の場所)へ移転
同	7 月 20 日	山陽鉄道(現 JR 山陽本線)尾道～糸崎間開通
同	11 月 25 日	尾道商業会議所(現尾道商工会議所)創立。会議所の設置は全国で 18 番目
1893(明治 26)	10 月	尾道収税署(現尾道税務署)設置。1896 年に改称
1894(明治 27)	同	三木半左衛門(名誉市民)ら有志の手により千光寺公園の前身となる共楽園完成(1902 年に市へ寄贈)
1895(明治 28)	11 月	尾道貯蓄銀行(後に備前銀行)創立、翌年開業
同	12 月 1 日	住友銀行尾道支店開業
同	同	株式会社尾道米穀取引所設立
1896(明治 29)	8 月 8 日	尾崎町に尾道電灯株式会社設立、翌年営業開始(点灯)
同	9 月 20 日	尾道町役場落成(後に初代市庁舎)。町長以下職員 24 人
1897(明治 30)	8 月	鉄道連絡船尾道～今治航路開設
1898(明治 31)	1 月 17 日	合名会社西原銀行(後の中国銀行尾道支店)開業
同	4 月 1 日	市制施行により尾道市誕生。初代市長に杉山新十郎(8/16～)、議長に豊田維徳(6/6～)。人口 2 万 1,792 人、世帯数 4,679 世帯
同	5 月 10 日	地元紙として「黄陽新聞」(後の山陽日日新聞)創刊
同	8 月 1 日	尾道商業学校が県へ移管され、広島県商業学校へ(1901 年に広島県立尾道商業学校に改称)
同	10 月 14 日	尾道市の市章制定
1900(明治 33)	5 月 29 日	尾道第一尋常小学校(現久保小学校)開校
同	6 月 1 日	尾道第二尋常小学校(現土堂小学校)開校
1905(明治 38)	4 月	尾道塩務局(後の専売公社)設置
1906(明治 39)	8 月 5 日	久保町商場に私立による尾道図書館開館。1914 年より市立図書館となる
同	10 月 19 日	尾道市医師会設立
1907(明治 40)	10 月	土堂本通りに尾道警察署庁舎落成
同	12 月 21 日	電話業務開始。加入数 141 軒
1908(明治 41)	4 月 1 日	尾道第三尋常小学校(現長江小学校)開校
同	12 月 21 日	市立高等女学校(現県立尾道東高校)創立。翌年開校

※ 出典資料…『尾道の記録 明治・大正・昭和 総集編』平衛資正編著、ひらくし集録事務所、1989 / 『尾道市史 上巻』青木茂編著、尾道市役所、1939 / 『尾道市史 中巻』青木茂編著、尾道市役所、1940 / 『新修尾道市史 第三巻』青木茂編著、尾道市役所、1973



市制施行直後の尾道名所案内 ～『尾道案内』より～



1903 (明治 36) 年 3 月 18 日発行 (複製品) 尾道学研究会蔵

(右上から反時計回りで「尾道市街ヲ東端ヨリ眺望スル図」「千光寺烏帽子岩」「全千畳岩」「向島小不二山ノ眺望」「西國寺」「御袖天満宮」「小歌島之桃園」「尾道港湾之図」「南之坊蟠龍松」「浄土寺多宝塔」市制施行から間もない頃の発行による『尾道案内』は、今日言う観光案内パンフレットといえます。表面には尾道の名所が8カ所ピックアップされており、観光都市尾道の先駆例として興味深いものがあります。尾道港湾之図(中下)を見ると、当時は海に向いていた住吉神社と共に、港の賑わいぶりが見てとれます。



『尾道案内』裏面では町内の著名実業家をイロハ順で紹介しており、商家(店)や銀行が林立する、まさに商都尾道の勢いや活気を如実に感じさせるものがあります。業種では、畳表や石細工、鍛冶といった尾道の伝統産業から、蒲鉾や乾物などの海産物や肥料、呉服を商う店が多く見受けられます。また、旅館もその数多く、人や物の往来が盛んであったことが、このことからうかがえます。

【『尾道案内』表面】

【『尾道案内』裏面】

市制施行 70 周年の前後  
瀬戸内の十字路へ ～尾道大橋開通～

市制施行 70 周年・翌年の尾道港開港 800 年とダブルの節目を迎えた 1968 (昭和 43) 年、尾道市にとってもう一つの大きな出来事が尾道大橋の開通でした。

1965 (昭和 40) 年 8 月に起工して、1968 (昭和 43) 年の 3 月に完成した尾道大橋は、橋長 386.45m・最大支間長(塔と塔の間の長さ) 215.0mで、国内では先駆的な本格的斜張橋(最大支間 200m 越えは国内初)として注目を集めました。

斜張橋(Cable Stayed Bridge)は、西ドイツにおいて 1950 年代頃から登場し(初例は 1955 年)、以降、世界各地へ普及しました。ケーブルで吊り支えられるその構造自体は吊り橋とも重なるところですが、塔の左右から斜めに張られたケーブルが、直接に橋桁と接続されている部分が吊り橋とは異なる構造となります。

尾道大橋の建設は本土と対岸の向島とを繋ぐだけにとどまらず、本土と四国を結ぶ本四架橋への第一歩として大きな意味を持ちました。また、この南北軸は鉄道などの東西軸とクロスして、尾道を結節点にした瀬戸内の十字路を形成する序幕ともなりました。十字路の機能は続く瀬戸内しまなみ海道(西瀬戸自動車道)、中国やまなみ街道(中国横断自動車道尾道松江線)の全通によって最終的な完成を見ることになります。



尾道大橋開通式の記録写真  
1968 (昭和 43) 年 3 月 4 日  
(故) 土本壽美氏撮影  
尾道学研究会提供

尾道の記録人・平櫛資正氏

各時代の尾道の姿を辿る上で、主軸となったのが(故)平櫛資正氏による『尾道の記録』です。同記録は、平櫛氏が完全手作りで作った尾道の記録日誌であり、1977 (昭和 52) 年から 30 年間にわたって刊行されました。

平櫛氏は 1915 (大正 4) 年尾道に生まれ、尾道商工会議所事務局長を退職後、土堂山手の自宅に「尾道の記録所」を開設し、主に近代以降のありし日の尾道を掘り起こされ、記録される事に晩年を費やされました。明治・大正・昭和の尾道年譜をまとめた『中国路の都市 尾道乃記録』(1977・昭和 52 年、以降も改訂に次ぐ改訂が重ねられた)、『山陽本線 尾道駅界限』(1984・昭和 59 年)、『わたしゃ尾道 港の生まれ』(1991・平成 3 年)など、当時の尾道の記録を精力的に刊行されました。

その中でも『尾道の記録』は、1978 (昭和 53) 年から 2006 (平成 18) 年まで年刊で作られ続けられ、主に地元紙「山陽日日新聞」の紙面からピックアップされた一年間の尾道の出来事が、細かくぎっしりと詰め込まれています。

刊行された『尾道の記録』全冊は、尾道市立中央図書館の郷土資料コーナーで閲覧できます。



尾道の記録  
平櫛資正著  
尾道市蔵